白竹ミ

中村俊定文庫
文庫 18
525
2

昌平坂學問所

内閣文庫

俳諧をこのこゝハ天地開闢の時より生有陰神陽神(カミ)(カミ)磯馭戸
俗に天下アそまつめかを喜哉遇可羨少男と乃ゝふ陽神ハ
喜哉遇可羨少女とゝ形へ給へり是ハ今とゝもるゝ所なん
こゝろゆ詞まもる而おのこ故よ是を言ハ始と言ると云神代ゝ是
文字定まりて人の世と成て世さのを造るより天三十一字と成る
八雲立出雲八重垣つまこめよ
やへかきつくる其ハ八重垣
此歌より定まる世と和歌風ゝれハ和哥と云和歌ゝ連
歌俳諧あ至連歌ハ白川の法皇の時代ゝ至歌の名有

内閣文庫

此号は先ハ俳諧と云を白の数もはるまるに日本武尊東
夷せんとの下向吾妻はの筑波ゆて
新たらつくをとこて幾夜かへる
と作りしかれは
かなくて夜よハ九夜日ハハ十日よ
少夫能しは堂の次作り是連歌の起と云り業平卿の
歌かるの仮の時ハ舟宴歌人のつれとなれぬえふしあれて
と云上ハ又逢坂乃関ハ越なんその盃は四のついまへのとき
て歌は未成手付とかり
後に和の流行時ハ法師小林と云連歌差合をかの白

法式の云伝まり是本式なり聯句法立之是より新式あり
俳諧と云ハ美門宣家々の云利口之物をなるむきたるかるへしム
那きとのよ人を付物いとぬとのよ知いとせ利口しとり狂
韻学大成ハ鄭繁詩語多桃諧俳を戯之諧ハ和也唐よたハ
和也て作り詩を俳諧と云又滑稽と云有滑稽ハ管仲
楚人答とハ本然よ一休和尚あ是ハ人よ和尚る答乃
舟乃上ハ知りていとを国利是古今集よりは歌を俳諧
歌と宣も是よ那とふ人て連歌のたてこと我世よ俳諧の
連歌とかり
夫俳諧とハ中ちまりて代々利口のことにたハむれ是迄紀

よ諧を知る人中に雅俗の格義自出をなすひく世とは廣
くいへども中古いうまでいまだ詞をひくかこれ名之志うに
亡師芭蕉翁此道に出て三十余年俳諧初て実成ならう
師の俳諧は名をしれ名をしれ俳諧は悲哀諧の俳
諧人さしは俳諧の名をて言葉に誠をもめく代むかしく
押移るもいうあるや師も此道に古人なしと云又故人
の筆をそれは来るにやをし今おりふ処の流も此後行を此
出てをそれ我をたすまず来者を恐ると迄く詞有むしまを
詩奇に名ある人多し皆その諧よりもく諧をたるふり我
師は誠なれりの誠を捨く永く世の先達を形る俳子

代〻人〻迄て此時俳諧に諧をなるや天正に此人の後
を待るや師をいうある人をて連俳也一之ん詞世に連歌有俳諧
をもんを連俳に成れも詞を連俳別てむしろ上ゆ法仕
をなるゆ世有俳無言と云ゆ声を云詞形ら俳言之連歌
ゆ出る声のものあれも俳言の方之序風に帳拍子律の
調子例ら〻ぬ切拍形と云歌之手句連ゆ出る異如就
虎そのゆ千句のものく詞俳言之連歌ゆ始ゆ詞の猿丸花
梅雲の峯秀雨小夕門出猫人猿女ゆの詞を言抄ゆを
給巴の用書ゆみも数多ゆく作るう拍の歌ゆ俳言之
名ゆめて〻おまるとうて如印花

我義みさゝ人あかつる邪

此句俳正遍昭さう聖の歌るの詞より考る俳諧のよ年

なう詞ゝ〳〵かゝんさんしるを上句と〳〵詞ゝ〳〵うんの

さんしるを下の句と書る先師のいそくいあ〳〵の俳諧句

雜俳あ侍さなしもはめやうあ思ひ入る雜

おりふてふ人のゝ乃くアてゝに

立かくれいるゝ〳〵もう邪

春ゝるはるの清のちりれて

なう恒ようて花ハ咲ゝ

次いく事あの柳ハ金糸連歌之四ゝ〳〵高き金く

俳諧之又月雨之入の浮巣をゝよめくとゝ句ハ詞よゝん

ゝなり〳〵浮巣をゝよゆゝんと云ゝ俳之又素月や時のつくく

双西てと云義句よあ此句れあゝんゝりゝふ振きん

詞ゝもに俳形〳〵なりをゝ句をゝみて一首のゝとく仕ふ〳〵ゝる義

俳諧なう詞あきん子有其かこの句此形俳之ゝ有

信ゝ一節よゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

詩ゝ連俳ハゝに風雅之上ゝこのゝのハ俳を而もその俳す

而ゝ俳ハゝ〳〵ゝと云ゝ形〳〵花よ時ゝ雪も俳よ農ゝる縁

の先ゝもゝゝ月もゝう〳〵ゝさこの比をゝゝあ又水よ住ゝ蛙を

古池よゝ込込水の音ゝいひゝ形〳〵て芭にあゝゝる中よを

雖のもつる筈に俳諧を付るつるにきはまるきはの句なるべしハ今俳諧の謂く俳諧の式のもハ連歌式
よりもて先達の沙汰ありしに連歌より形式を追加りに
二條良基撰改作之今案ハ一条禅閤の作この三ッを一紙と
したるハ宵柏乃作と連ねると数あるなハ四と一七句去
りのハ又句となり万俳諧なるハもをやをくゆ法一ならく
今案の追加又漢和の法をもを大抵俳諧の法とむりよを
ならく真法の差合の書そのかそのを世にあるそのもの
をもくハ師信用ならしと云りその中に俳諧言とはあ
ハおよろしと云ふ差合のもも形くてハ調ふ

師の門よりそのつたへのかりしといへハ甚つもを不く法を垂と
ものハ重記而之さるもをれりとおといるる名あれて
主法ふてはりてハ主名の詮るり代ゝ河まるおはかりと
人用ひさるハ何ゝるるをや法を出して私ふを守れとハ
恥りき而之差合のもハ時宜あもよるゝ先ハ大ふに
りて宜ふたるこて説さりあるつ者ハ垂み読りて位用り
て学ぶるりの密ふりの門の法ふも形さハ法へ
歩のもを先師云ッひりよを二句法されハ用ふもうれ
句ハ歩の詞を差句集メ歩その詞をつ重句とるりてんの
歩れ説をもハさるこいまるふ而ハ歩別る大切のもく形をまや

もうしたそのかゝ宗砌宗祇の比之一句ゆゑ止るの例多し紀
行の比後所〻門人も読して一句ホてもゑ〻さるもはん
うと之又ある時云ゝおゆゑ之も悪句なりとも所付かゝ紀句は
時々必ゑの句を付ておゆゑの句ゆゑに悪しくなる〻〻と之是ゆゑハ此
句ゆゑホてつゝく悪きも及へうに新式ゆゑ此沙法あるゆゑ
ゆゑ也ゆゑの句ハ分て手座の宗匠に任せ〻〻と之旅のゆ
ある俳ゆゑ源の句連歌に旅の句ゆゑ二句つゝき二句ゆゑ止るゆゑ
多くゆゑハ神祇天爰悪所の句旅ゆゑ也ゆゑ
今旅ゆゑ発句ゆゑて又一句〻〻此ゆゑ俳の句ハたゝ此田
舎ゆゑ也ゆゑを知ゆゑて和歌を載へ淀の川ゆゑ乃ゆゑ

新の仮ゆゑ名ゆゑと本ゆゑと也〻〻と八連の教ゆゑとあり又旅
東海道の一筋も三〻ゆゑ人風俗不変ゆゑ〻〻も云ゆゑと有
本歌を用ゆゑ新式ゆゑ云ゆゑ新古今已来の作者を用ゆゑ之
八代集八古今後撰拾遺後拾遺金葉詞花千載新古今也
之後土御門依勅新勅撰後後撰二代を加へて十代集ゆゑ
本ゆゑゆゑ又堀川院の作者ゆゑの所八十代の所の集ゆゑ
ゆゑたゝひ集ゆゑゆゑ所ゆゑ也ゆゑ味ゆゑ之ゆゑ云ゆゑ
又新式ゆゑいく人のわきまへくさるゆゑを八付合ゆゑ也をぬ
也へゆゑ所ゆゑゆゑ連ゆゑ小八引用ゆゑ一〻ゆゑ
本ゆゑ也ゆゑ連ゆゑ也別あり本ゆゑ也ゆゑ八古ゆゑの詞ゆゑ

合て付るを以て詩分とハ聊遠き或ハ一句余情又名所續
合うる句を付るを以て詩分ハいつ迄の集にてもてきるゆへ
論迦のゆ新式ハ素(タキモノ)と云句にかゝると付てまゝ紅葉を付へか
らぬ所まて付へしとうとう字かゝる所之義と云句に面影
付て春花を付る平面彩りのとうてを代ふ付ゝ更ゆ理ゆ
ふ腸之又たとへハ花と云句に風も霞も付て又ふて付ゝ
数句を重ねてふとも一座まて腸之他准之又竹と云句に世
と付て又竹出る時夜の字ふ付へめ式の歌を輪廻ゝあしと
云ハ山と付次ハ富士部と付ハ其所へ歌ゆ所ゆ歌ゆ
照地准之一巻の内似る句腸之なり色を輪廻ゝ本歌の

ゆ句ゆ歌ゆ所ゆ歌ゆ代の句ゆ先ゆ句ゆ歌ゆ
句ハ歌ゆ歌ゆ句ゆ歌ゆ別て味へしゆ句に
障る他の句ある時ハ必句ゆ句ゆ句ゆ
句ゆ句ゆ句ゆ句ゆ表と裏のゆ
へしゆ句ゆ連歌ゆ句ゆ句ゆ大抵のゆて本歌ゆ歌ゆ
や枝ゆ花ゆ花ゆ句ゆ句ゆ句ゆ句ゆ句ゆ句ゆ句ゆ
て全ゆ句ゆ句ゆ句ゆ句ゆ句ゆ句ゆ句ゆ
ゆ句ゆ句ゆ句ゆ句ゆ句ゆ句ゆ句ゆ

歌ハ句ハ句ゆ句ゆ句ゆ句ゆ
秋風ゆ句ゆ句ゆ句ゆ句ゆ

邦あはこそ蓬屋をてふ
をみちちうをく白川の関

式部の夏師のいとくいあ〜へうの色をひろたる俤さそ
ふてはれのうれしるとこそあるこはちとつる〜今師の家
所後のうこと卯月はれを出て十月まで及ひ白川まとり取蓬
のうちを歩るをそこて前の能因法師此家をたひ出し孫
その家の妙所を感涙ちうとこそいふうに詠る家那〜元
ふてはれうくれうとこそ切字の中師のいとくこそ〜ふを
用ひある文字にも用〜連俳の去まを要くあるもの切字なく
ふはを句此歌まはうにあ付句此歌之切字を加へくも付句此

歌ある句はう詠まは切る句にあ〜ふ又切字なくても切
句有を分別切字の并一とその位ハ自然とあ〜されハ去
まうこ〜猶は俳あ師考まを大切ふ〜てふされ之
あこくそのあもをちふ柳の花と云句をして切字を入るも
を崇〜られ〜俳まはうて此句ハ切字なくて切字のように俤
ると云ハ切字こさしれも切字をたしうたにへるうう初心の
人乃道のうちひあ此てあ〜いつねまはう〜もへ〜ま〜て
はせるもあき句をあるを句をちひやもとも考またし〜なも
へ〜ふ〜ふされ〜之
文章のもの師此いとく趣名を文章とふこ序まは由序来

序内序とふ二体あり由ハ詩るゝを序来ハ先
のゝを序内ハその古の用れるを古之体をひとつは
て序ゝるも序るゝ跋ゝ序ゝるゝ序あつく跋あて序
も跋もその古而用ゝ跋ハ序を後番ゝく云ゝ物之ぬゝ
とゆりて番ゝく生るれ仙之序跋ゝに多号自を云又字
七字古ハ考ゝの格之七又之形ゝ地の詞九ゝ云あるひゝ
詩あゝ附を必對を並く古ゝを並附ハ古ゝれ對野山水
色生歌ホおのゝ對用ゝ詞古ゝの古格和ゝあひゝし
漢小ハ古後もあゝゝと記ハ古物を記古の仙之格ハ序
跋ゝ同ゝ古の遠のゝ格ゝあゝ同ゝ古れ遠のゝ賛ハかゝる

八

のゝ仙之即山吹ゝ句を古る附ハ山吹をゝ色て賛之山吹を
褒義の義理之物るゝ文章ゝ古附四文字くゝ古大ゝの格之
句合制のゝ応義制ゝ云ゝ連中の打毒詮俗批判ゝる
を立ゝ蛙合ハ応義判の格之故ゝ判者も古ゝ形ゝ人判
ゝ云ふ附ゝ者奥ゝ跋ハて也序ゝて也ゝゝ自引
ゝて也ゝる之ゝに古合ゝ応古の物義ゝれ制もあゝ応
古の制ハ古ゝゝ文章を立ゝ判ゝ行ゝ雜陳(ナンチン)あつく
判者を古ゝれハを加ゝ応判を古之巻応ゝ多く
ゝ物のゝの

懐紙のゝハ百韵ゝ式之五十韵ゝ仙ゝれ畧れ之連歌

九

の古式ハ表十句各銘の裏六句身七句去花裏表ヨリ一巻
究表の句名亦必一巻今も清水連哥をはじめしとなり
師のいとく古法表十句の例をもてハ句ハ後二句ヨリ
表ヨリ始ふるの歌連歌に今にせを倣ヨハくるしかれ連
哥に就虎鬼女さし出る歌表の句猿俗諧小も鬼女ハ
形うるし就虎ハくるしかれそのか人を数を切るもの
なとれ歌ハ用捨せしに百韵一巻ヨリ巻へうれと師の云こ
又巻の詞述懐の歌狂言に云る句ハ表の句いう侍ん
とたつる時師のいとく句にうるへし又字ハくるしかれ
狂言よいひるをとも人のうへに云ちいよく述懐之花のさし

紀の歌をくるしかれ家ヨリ発ヨリ多ちく金乃実
家を移を句ハ用捨せしに他人の句ハとるもてしを又意
をもを外婦ヨ古中外歌を下くるして表ヨあくされ
又他物のくより用ひる形とを句の歌いう侍ん六師乃
いとく大形ハ表ヨ婦ヨしにもるくきるるいつれと
てもくるくるの詞ヶ出されしてくの下に婦ヨを持るハ
他者清かれくきるる形一向ようちもて表るる能る
しにもくる表の歌ヨあくされハ考ヨくるしかれうもせ
とふあハれと云至又古今の人の名表ヨもをるいく侍
人とうるに師の云今ハ人乃名をつしもへし古人

の名ハおよそてくるしかるほしさしもぬるしく熱
と云至懐紙ハ意を略くていとしのむしよりとかけし
あるなくてうるハさるゆうぬぬんハいとあと云ハけゆハ知て
大切のゆえ懐紙ハ意を用るゆ神代よりはかた
まるの例と思ふくてハ途るさゆえつしむしと
師のいとくたとくハ宇仙ハ三十六歩三一歩もあとに残るん
なし行ハ志ろう仏の改ハたく先へ行んたるれハ之数句ハ
ゆハ一座者の訳られハ初心の者ハ云ハ一八会巧ハ
さ沙法を句姿もるく位よろし紀を主しとむしよる
云ける先師ハ懐紙のかの句かろさをゆれし之時代ゆもるき

ゆゆや侍人又古来より新宅の舎に煙る懐ると少ハ
遠悔ハくるれ乃遠ふ罷とゞ紀中に残るもつむ流風ハの
れいむへきん半ひとと又新ふ具の唱一座ハ芸舎ゆ云めく
ハへしかの句のこに沿きんれあるへし拙ハ亭主のゆす
事むしよりハ云ハられも芸ハふもよるへし客ハ句
とてむしハ必宗よりハ挨拶并一にかの句を新ハ拙も答る
こくにしけて挨拶を付侍るこ師のいとく拙亭主ハ句城
云る亦ゆ挨拶之雪月花のゆハこそる句少てもあい
さろのハこと之教こかの句に之月ハ後る京ハ出る時ハ紀
ゆて尚季を定むへしこハ連歌のゆこ俗ゆもきん考ん

之師のいくさの句に神祇尺教を分一句ごとに抵抵して
抵抵したる詞はもさんるもいはんるもあるべし但水祝部の
季一座ごとにして云句を抵抵無なくてもなるべしたる句
は依一一對付遠付うち添はるの歌むしより云意所之
師云分一句をうまてつりあひをもてうち添て付る
より句中に抵をぬるもあるべし当りは文字をもはを
宜敷しからず当メ自然よりある句法あり非一意対合体
のいとなりつ一一抵去ら句へさは先句もとくゆ
去発させるもあるべしも抵去より句表をあるいはやうも
祝部してよくゆせて抵抵しいかさるかはいをれして

句下敷もしたるべしは連句のから句は聯句は唱句之掘を對之
此格をいて文字当之詩聯句にもて韵とふ之者三は師の口
大付ありても特して考るべく抵抵しとなり或去る当りの
もの一ゆたる一宗祇より此格式之者用る通りなり
疑の切字は句乃時を分之とも孫字にとあるとも古来云り
うちひの句二句去前之後はうちひのもの字なり句中は
押一字あるやかいつ付るとの抵之又句はよりて押字なく
てもるあり一字もるをもんちんの抵之ゆ当り於句
の分之ゆて当メせんとむしより云り是治宝の分なるべし
と之花のはうゆ身は完ゆの抵之盛りあてひうりあて

といふのようふこ先師のいとくあてになる小笛メくるしかれ
ども笛ハ始ふへしとふり文字笛を示蒸笛自然よりり
古法に傳有ふこ一説古書こあるハ拍の合韵字留りゆへ
臨春小文字留りなるバざるゆへに笛之為掘を示蒸まて
笛メは分三文字留ふて留るとも立をかくしたるゆをを人ふ
ゆ者の笛をよしとを先代乃留之分三ハ指を城ゆ
とをしとも掘の句によるへし遠付れ和し付ふの合代時
ゆ分三ふて指をるにおよハさるゆなるか句迄補抵
ふのものふて掘を に庶ふ迄時分三にふり必を指し
とあれとをしし師の説之四句めハもしより四句めゆる

と云て中をくかるきをよりとれ師のいとく主きハ四句目
の体ふ河しを掘ふ迄しくを句中に体をせをとをとをふ本説
和と始ふるふ之妻秋の李つきハ句目まて花月の句をを
ふ必あるふしとの師説せふ句めハ七句めれふ三てふ説ふて
古説ある七句めも同しくれを之分三の後一帆上の句を賞とれ
中ふも月の産ハ名ある而之老分に笛へ月字を表ふ始ふ
も懐紙をたし形を而之て留とふ字留ハ句九一体表道
具とを裏ふ来て四妻八木と連歌ふ古説あり四句め妻を
せをハ句めふ言うへ始せをれ花ふつる句体を表之他諸も
くれを他の句を返をにをふ及妻出ハ花を付へしを体

おしなべて花とあるを花のあるを白とあり秋の字用ゐたるべし然れば
花をむつうしさかりと連歌は秘して歌にはよりてしむと
之他をかたるべし自の定座をこそたるべし師のいはく又十句
より内はあるべうもなし奥義玉つくしは少の異也なるものなり
宗仙はくるしかる句は畧の物なり自の座身は定有時も差
合る時は変名あるべしと吳名の仕さんこの他をあるべ
しと師の説之又師のいはく自は上句勝たるべし為身を
身の句つしむべし時はよるべし法はあるべしと星月夜
八秋ふて黄の身ふはあるべしかるに出る時は十秋は
他季あるべ有時はるべしと身といふ字にて句路と形式

白

はなり師の曰表は月二ッ稀は有ぶ時は身数八つ之名の裏は
まれも自然しと之花のるは花は本の内下れ句は一句さう
定座まれもこれたるべしと之賞花の句花の付句
又その一句のくう実は梅菊牡丹形とてんにして仕立ぶ花
あるべしる句その木まにちさうひ季を持ぶ(さう或は
四月は花をるまる九月に花咲ると云句いと云は師の曰
九月は花咲なといふ句は非云之形きるべたく名本我
慢して花と外云も四花之花とふは桜のるべ形
表花をいるを四花はせしては花の句あく出る賞
慢しと宗祇の時代を百韵花之本之雨一ッ之宗也の時

まいてうの白ひの花一本雨一ッ勅許を蒙り文台美風せう
生て花四本雨二ッ降々降り付る速奇の式と師の詞と
裏一吹の雨も初のふ〳〵くかろ〳〵とあるべし白なるを退ふ
ふも及ばと揚句ハ付るよしと古説を今一句まで乗ず
一座興覚るなんとまと差て東〳〵雪とも雪とか白き美な
亭主の雪る所よあれ初の一吹ハ執筆ハ白形くハ揚句成
筆ハ雪〳〵白ひある文字をてしむとも白ひの花まで
雪雪又白に移るとも揚句に雪をそ形ハ〳〵ふたたび雪
云句に及ても雪〳〵といつまの雪迄ても揚句ハ白
なりの白ぬりハあるべし